

トピックス

〈看病する母〉と〈看病される娘〉の「病い」をめぐる対話

Virginia Woolf, *On Being Ill with Notes from Sick Rooms*

by Julia Stephen (Ashfield, MA: Paris Press, 2012)

加藤 めぐみ

「家庭の天使を殺すことは、女性作家の仕事の一部だった」——ヴァージニア・ウルフがエッセイ「女性にとっての職業」（1931）のなかで女性作家の仮想敵とした「家庭の天使」とは、ヴィクトリア朝詩人コヴェントリー・パトモアの長編詩『家庭の天使』（*The Angel in the House*, 1854–62）のヒロインのことである。この「従順で清らか、自己犠牲的で同情深いヴィクトリア朝の理想の女性像」の幻が男性作家の本を論評しようとするウルフの耳元で「男性には賛成して、おだててあげなさい」とささやいたという。幻を殺さなかったら女性は書きたいことを書けず、自分の作品が殺される。だから「家庭の天使」を殺すことが女性作家にとっては必須、というのだ。ウルフの母、ジュリア・ステイーヴン（1846–1895）はまさにこの「家庭の天使」の象徴的存在だった。8人の子供を含む大家族を支える母、献身的な妻であっただけでなく、バーン＝ジョーンズなどラファエロ前派の画家たちにインスピレーションを与える美貌の持ち主であった母ジュリア。13歳のときに死別した母に対するウルフの思いは複雑で、代表作『燈台へ』（1927）のなかで、その思慕の念と反感との葛藤を、物語の中心に座すラムゼイ夫人に対する画家リリーのアンヴィヴァレントな感情として描き込んでいる。そうしてウルフは「母＝家庭の天使」の幻影の呪縛から解き放たれ、女性作家としての精神的自由を獲得したのである。

本書 *On Being Ill* は、この〈ヴィクトリア朝の「家庭の天使」vs. イギリス戦間期の自立した女性作家〉という単純化された対立の図式には収まらない母娘のより複雑な関係性を示そうという試みである。一冊のなか

にウルフのエッセイ「病むことについて (*On Being Ill*, 1930)」と、ジュリアが慈善で行っていた「看護 (nursing)」の仕事のポイントをまとめた「病室での覚え書き (*Notes from Sick Rooms*, 1883)」とを併置することで、母娘が「病い」を軸に新たな形で結びつき、〈母＝看病する側 vs. 娘＝看病される側〉という正反対の立場から見た「病い」の世界を読み比べることが出来る。さらにそれぞれに序論があり、あとがきも添えられている。Hermione Leeの序論では、ウルフと病いとの関係、*On Being Ill* 執筆、出版の経緯、ウルフの遊び心のあるエッセイの書き方を評価しなかったT.S. エリオットとの確執、さらにはウルフの文学的な引用を丁寧に解説している。他方、*Woolf Studies Annual* (1992-) を20年にわたって毎年発行してきたウルフ研究者 Mark Hussey はジュリアの生い立ち、人となり、また二つのエッセイを同時に読むことの意義を整理している。そしてあとがきで Rita Charon は、臨床医の視点から両者を比較し、ジュリアからは患者に寄り添う看護師の思いやりを、ウルフからは他人には理解不可能な患者の痛みを読み取り、双方の理解こそが医者には大切と説く。

ジュリアはヴィクトリア朝の上層中流階級の「家庭の天使」たちがよくしていたように、慈善・社会活動として、貧しい人、病んだ人を熱心に見舞い、世話をした。病気になったとき以外は母と二人きりになった記憶がない、とウルフがいうほど、ジュリアはいつも多忙で、だからこそウルフは常に母性的な愛を渴望していた。『燈台へ』には、ラムゼイ夫人が自分は単なる「訪問者 (visitor)」ではなく「社会調査員 (social investigator)」だとして、清潔なミルクの供給の必要性について熱弁を振るうシーンがあるが、この小品にも「介護人」としてのジュリアのプロ意識の高さが表れている。「看護の心得」にはじまり患者の最後の「看取り方」に至る「病室での覚え書き」のなかには「ベッドのクズや髪の毛の処理、防水シート」といった衛生面のケア、「食材、食べさせ方、調理法」などの栄養管理だけでなく、「患者への嘘のつき方、妄想やイライラした神経の対応法、見舞いのマナー」といった精神面のサポートまで、患者の目線に立った細やかな心遣いであふれている。我々はヴィクトリア朝の家庭中心主義のイデオロギーの枠内で「社会奉仕、執筆」という形で才気を発揮していたジュリアのこのエッセイのなかに20世紀を代表する作家に成長する娘ウ

ルフに受け継がれた文学的センス、ウィット、社会意識の遺伝子を見出すことができる。また、ジュリアの看護にかけた情熱、貢献を称え、彼女の死後設立されたジュリア・スティーブン看護協会の活動は、ヴィクトリア朝の上層中流階級の女性の看護のあり方を示す資料として、社会史、文化史のより広い文脈のなかで、検証することも可能であろう。

いっぽうウルフは、母を失った直後から59歳でウーズ川に身を投じる日まで、生涯、心身の病いと闘いの日々を送った。高熱、めまい、頭痛、不整脈、不眠症、インフルエンザ、肺炎、拒食症、躁鬱病、神経衰弱—睡眠薬や精神安定剤を処方され、時には安静療法として読み書きを禁止された彼女が「病気が、愛や戦いや嫉妬とともに、文学の主要テーマのひとつにならないのは奇妙」だとして病の床で経験した肉体の日々のドラマを文学で扱うことの必要性を説いたのが *On Being Ill* なのである。ウルフは自らの主張どおり『船出』『ダロウェイ夫人』『波』で「熱病、鬱病の恐怖、妄想や自殺願望」を描いた。そしてウルフのこのエッセイは D. J. Enright 編の *The Faber Book of Fever and Frets* (1987) のようなアンソロジーははじめ「病いの語り／文学」の系譜学のなかで重要な位置を占めている。

本書のなかでウルフはまた、母の説く病人への同情心を否定するかのように「病人の痛みは決して誰にも理解出来ない」、「同情するのはヒマな社会の落伍者や女性ばかり」(10) と看護する人を蔑み、「つねに同情、同伴、理解されるのは耐えがたい」(12) と断言する。そして慰みを「人」からではなく「空」や「バラ」などの自然に、散文でなくシェイクスピアの「詩」に見出そうとする。しかし病んで弱気なウルフに「同情」が本当に不要であったはずはない。彼女はつねに夫レナードの庇護、恋人ヴィタ＝サクヴィル・ウェストからの愛を強く求めつづけていたからだ。

〈看病する母〉vs. 〈看病されたい娘〉—40年余りのときを隔てて書かれたはずの母娘の「病い」をめぐるエッセイを読み比べたとき、それがまるで合わせ鏡のようにも見えてくる。「愛に満ちあふれているはずなのに肝心の娘に十分な愛を与えられなかった母」と「母の愛を渴望しているのに意識的にはそれを否定し、強がってしまう娘」が対話しているかのようだ。もしもジュリアがもっと長生きをして、ウルフが母を看病する立場になっていたら……20世紀の英文学史はかなり違っていただろうかもしれない。